

大分合同新聞

創刊1886年(明治19年)

大分合同新聞社

〒870-8605 大分市前内町3-9-15

© 大分合同新聞社 2014

大分 097-536-2121 別府 0977-22-2121
FAX 097-538-9674 FAX 0977-25-1230

朝夕刊 完全連続紙

単独販売の朝刊、夕刊、統合版はありません。

9/21 日曜日

朝刊

「残材」発電に活用



高さ20メートルを越す樹齢40年の隣の木にチェーンソーを当てる音が立てて、急な山肌を滑り落ちて、照り付ける8月中旬、日田(56)は周囲の安全を確かめ、採る素材生産業者「F

「山が変わり始めた」

MC(フォレスト・マン・カンパニー) (同市)の男たち6人が、黙々と作業に従事していた。地元の木材市場からスギ林16分の皆伐を請け負って1カ月余り。今日は20

④スギを造材し、木材市場行きとバイオマス発電所行きに分け、並べる重機。重機がつかんでいき、細い材も山から運び出せるようになった。⑤急斜面でチェーンソーを巧みに使っている日田市の林業再生業者。日田市中津江村。撮影・大久保豊浩

明日の力

おおいた発 再生エネ

り、見た目も気分も良くなった」と話す。理田は昨年11月、市内天瀬町で稼働した木質バイオマス発電所(出力5700kw)だ。「以前は1本の木を切っても、曲がった根っこの部分や先端の細長い部分は売り物にならず、半分近くは切り刻んで山に捨てていた」。そうした未利用材を発電所が燃料として買い取り始めたことで、運び出すことができるようになった。



教えて! ぶんぶん 大分県

仙頭屋敷 どのページかな? こたえを探してね

27面に続く

0本くらい切るかな。これだけ広いと年内いっぱいかかる」。この道20年のベテランは顔にはほとぼる汗をぬぐった。「山の様子が変わり始めた」。日隈さんはこれまでにない変化を感じている。既に伐採を終えた斜面は山肌がむき出しになり、切り株が目立つ。そこを指さしながら「かつての現場は切り株が残材(未利用材)などに埋もれて見えないくらいだった。その残材が減



それに伴って、山仕事の内容も変わった。切り倒した木を注文を受けた長さに、林業がもつからない山、手入れの行き届かない山林は増える一方。「山が掃除されて、山主(山林所有者)が再び木を植えやすくなれば、山は生まれ変わるのではないか」。持続的な山づくりに危機感を抱く現場のプロたちは、バイオマス発電に新たな可能性をみている。

日本有数のスギ産地・日田に林業再生を掲げるバイオマス発電所が誕生して、

年間企画 第6章 森を生かす①

林業「3K」変えたい

日差しがやや陰った午後 皆が相づちを打った。

5時、日田市中津江村での

山仕事が終わった。朝8時

から休憩を含めて9時間。

市内の素材生産業者「FM

C(フォレスト・マン・カ

ンパニー)」の男たち6人

は各自の持ち場を離れ、木

が倒されて見通しが良くな

った急斜面を下り、合流し

た。淡々としたベテラン、

泥だらけでヘトヘトになっ

た新人。「きつい、危険、

給料が安い」の3Kだけど、

仕事の後の一杯がうまいん

だ。一人がつぶやくと、

若くして現場の責任者を

任された内田健太郎さん

(26)は6年目。玖珠町出身。

高校、大学では土木を専攻

したが、公共事業の減少で

地元土木建築関連の仕事

は乏しかった。叔父でFM

C社長の諫山啓輔さん(59)

に誘われ、林業の世界に飛

び込んだ。

「山や川で遊んで育った

し、迷いはなかった。四季

を感じられ、木を切って山

を生まれ変わらせる仕事は

やりがいがある」と話す。

だが、日本の林業は安い

給料が安い

だ

が

、

日

田

中

津

江

村

輸入材に押されて厳しい状況が続く。国の統計で見ると、山林所有者(20畝以上保有)の林業所得は年々減り、2008年度は10万3千円。大規模な山主でも

ほとんどの利益が出ていない。

その山主などから伐採を

請け負う素材生産業者、諫

山さんは「仕事の単価は25

年前の3分の1くらいの水

準」。なかなか将来の展望

は描きにくい。

そこに登場したのが、未

利用材を活用するバイオマ

ス発電所だ。「売り物にな

らなかった木が売れるのだ

から、すぐ期待している。

林業全体の収入が増えれ

ば、素材生産業者の待遇も

改善されていくはず」と諫

山さん。

内田さんは6月、林業機

械メーカーの招待で、林業

先進国オーストラリアを視察

した。山深い現場で最新の

重機を使った効率的な集

材、安全への配慮も行き届

いた手際の良い作業員など

を目の当たりにして、「自分

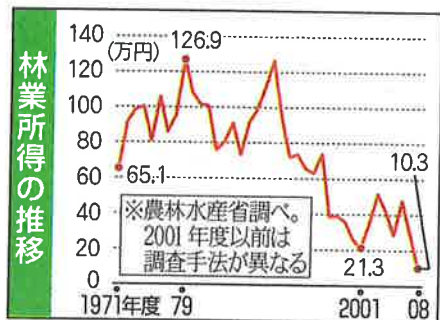
たちの仕事はまだまだ改

善できる」と強烈な刺激を受けた。

「誇りの持てる仕事だからと、後輩を誘っても反応が良くなって…」と苦笑いする内田さん。「バイオマス発電の追い風と、現場の努力で林業のイメージを変えたい」と力を込めた。

明日の力

おおいた発 再生エネ



「バイオマス」追い風に



一日の山仕事を終え、談笑する内田健太郎さん(左端)と日隈稔彦さん(左から2人目)ら=8月中旬、日田市中津江村

1 第41496号 (昭和17年4月3日第3種郵便物認可)

明日への力

おおいた発 再生エネ

年間企画 第6章 森を生かす②

発電所は燃料として年間約6万トンの未利用材を使う。10ト車で6千台分。日田の運送業界に「未利用材ビジネス」が生まれた。

木材運搬用トラック7台を所有するTOMODAは昨年末、市中心部から発電所近くの山あいには本社を移転した。社長の梶原義文さん(53)は「木材市場向けは仕事量にはらつきがある。24時間運転の発電所ができて、事業の見通しが立てやすくなった」と喜ぶ。

稼働前の昨年、2500万円するトラックを1台増やし、10月にはもう1台増やす。ドライバーも増員していく計画。枝葉など細かい未利用材でも運びやすいよう、かご型の荷台を独自

日田市天瀬町のバイオマス発電所では早朝や昼休み明け、入り口に大型トラックが並び、周辺の山林から運び出した未利用材(残材)を搬入する順番待ちの列だ。

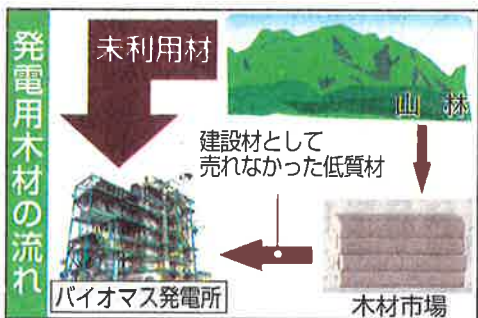
「ここができたおかげで仕事が増えたよ」。先頭車両の運転手はそう言って、笑みをこぼした。

安定需要で新ビジネス

低質材価格も2倍超に



山林から搬出した未利用材を積み、バイオマス発電所の入り口に並ぶ大型トラック=9月初旬、日田市天瀬町

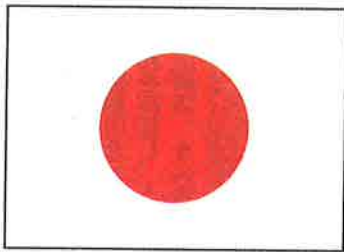


開発し、新たな需要に対応しようとしている。林業経営にも好影響が出ている。日田郡森林組合によると、木材市場に持ち込まれても安い製紙用にしかならなかった低質材が、その2倍超の価格で発電向けに売れるようになった。発電所が1年間に買い取る総額は、低質材と山に捨

ていた未利用材を合わせて数億円の見込み。それが山林所有者の新たな売り上げとして、原木の年間販売額(約20億円、2012年・日田市内)に上乗せされる計算だ。専務の江田邦光さん(62)は「行き場のなかった木材が林業収入を底上げしている」と話す。

日田地域には根元が曲がって育つ品種のスギが多く、1本から取れる建設用材の割合が低い。未利用材の放置が減れば「(組合が推進する)まっすぐ育つ品種への植え替えもしやすくなる」との利点も挙げる。

とはいえ、バイオマス発電が林業の課題を抜本的に解決できるわけではない。県林業経営者協会長の長哲也さん(61)＝日田市＝は「林業を守るには建設用材の価格上昇と安定が不可欠」。その上で「経営の下支えとなるバイオマス発電を応援したい」と考える。



きょうは秋分の日

株式会社 **大分銀行**

明日への力

おおいた発 再生エネ

「未利用材でクリーンな電気を生み出し、発電した分だけ山をきれいにできる。この仕事に喜びと誇りを感じる」

日田市天瀬町にあるバイオマス発電所で、社員の西尾雅之さん(28)は充実した表情を見せる。24時間運転の施設を保守管理するリーダー。設備に異常はないか、燃料になる木材チップの乾燥は十分

年間企画

第6章 森を生かす③



燃料となる木材チップがきちんと乾燥できているか確かめる西尾雅之さん(左)と権藤哲弥さん=9月初旬、日田市天瀬町のバイオマス発電所

地域に貴重な雇用の場

展望開け誇り持つ若者

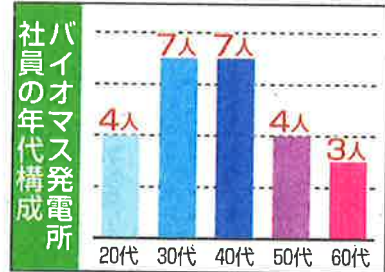
か、トラブルが起きないように目を光らせる。

「自然豊かな環境で子どもを育てたい」。大分市に住んでいた西尾さんは昨年、妻の実家がある日田市に発電所ができるのを知って採用試験を受けた。単なる発電事業ではなく、地域の基幹産業である林業の活性化を目指す理念に感銘を受け、電気工事の会社を辞めて移り住んだ。家族4人、7月に次男が生まれたばかり。子育てに両親の手が借りられるので助かっている」と笑う。

市中心部から車で約30分の山間部にある発電所では20〜60代の25人が働く。平均年齢は35歳。全員が新規採用の正社員で市内で暮らす。過疎・高齢化が進み、雇用の場が少ない地域に生まれた貴重な職場だ。安定

「30は市内の自動車部品工場から転職した。地元で生まれ育ち、若者がどんどん古里を離れ、地域の活力が失われていくのを救う感じがしたい」と日田は元気に話している。それに少しでも役立てる仕事に就けたのはうれ

福島第一原発事故で、エネルギーの安全性に対する視線は一段と厳しくなり、バイオマス発電への関心は高まっている。若い世代の多い社員らは「世界中の目となる、一番のバイオマス発電所に育てたい」と意気込む。



運転員3人がモニターを見ながら、ボイラーの温度や圧力などをチェックする中央操作室。権藤哲弥さん 夢を描いている。

1 第41498号 (昭和17年4月3日第3種郵便物認可)

明日の力

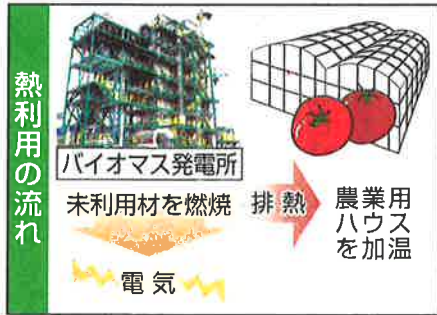
おおいた発 再生エネ

年間企画 第6章 森を生かす④

くる際、大量の熱が発生する。エネルギーの効率利用には、その熱を上手に使うことが鍵となる。先進地の欧州では、住宅地の集中暖房などに生かされている。

農業への活用は、発電所を運営する森山政美さん(62)が「立地効果を最大限、地域のために役立てたい」

「発電の排熱で暖房するハウスを建て、おいしいトマトを育てるんです」
日田市天瀬町のトマト農家、長尾正巨さん(64)はバイオマス発電所に隣接した建設予定地で図面を広げ、計画を熱っぽく話した。
バイオマス発電所は木材チップを燃やして電気をつ



トマトハウスの建設予定地で、計画について話し合う長尾正巨さん(右)と息子の勝巳さん。奥が排熱の供給を受けるバイオマス発電所。9月初旬、日田市天瀬町

農にも恩恵 日田モデル 広域的なバランスが鍵

と考え、減農薬栽培にこだ
図っていく上で懸念もあ
わる長尾さんに声を掛ける。
た。

高台にあるこの地域で
材を運搬コストが採算に見
合う半径50き圏内から調達
まで気温が下がり、農業に
している。もし発電所が乱
は厳しい環境。長尾さんは
立すれば、未利用材が不足
20坪のハウスを建て、発電
し、発電所の共倒れが起き
所からの排熱で室温を15度
に保つ計画。加温するため
の燃料費が年々高騰する
中、かなりのコストが浮か
せそうだ。

未利用材を使う県内の発
電所は日田市(2カ所)、
豊後大野市(来年の稼働予
定)、佐伯市(2016年
春の稼働予定)の計4カ所。
県林産振興室は県内の森林
資源量から「現状が適正」

エネルギーの面だけでな
とみており、立地の相談が
あつた場合はこうした課題
を説明しているという。
雇用創出など、地域にさま
ざまなプラス効果を生み出
し始めたバイオマス発電
所。ただ、これから定着を
との連携を含めて広域的に
バランスを取る視点が欠か
せない。

1 第41499号 (昭和17年4月3日第3種郵便物認可)

明日への力

おおいた発 再生エネ

年間企画 第6章 森を生かす⑤

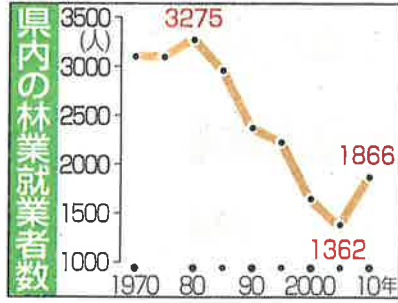
カ月が過ぎた発電所について、4人は社長の森山政美さん(62)を取材。山に捨てていた未利用材を燃料にする発電の仕組みや林業再生に懸ける思いを聞いた。

「原子力を使わず、自然に優しい。環境のことを考えていて日田の誇り」と吉武木実さん(10)。川崎奏奈さん(11)は「日田は森林資

「木で電気がつくれるなんて、すごい」

8月初め、日田市若宮小学校の5年生4人が、バイオマス発電所に好奇心いっぱいの視線を注いだ。市が「古里の産業を知ってもらおう」と公募した夏休み恒例の一日記者たちだ。市内天瀬町にできて約10

担い手の育成 重要課題



社長の森山政美さん(右)を取材する若宮小学校の一日記者たち=8月初旬、日田市天瀬町のバイオマス発電所

源が豊か。もっと生かされたら」と感想。森山さんは「エネルギー利用という木の新しい価値を知り、林業に関心を持つ子どもが増えてくれるといい」と願う。

河津さんは長い間、木を建設材や肥料として生かす教育をしてきただけに、何十年もかけて育てた木を燃やす活用法には、まだ違和感があるという。ただ、現実と将来を見据えると、「1本の木を建設材や培土、エネルギーとして無駄なく使っている。厳しい環境の中、若い世代には、温暖化防止や資源の循環にも貢献できる仕事は魅力的に映るので、はないか、とも思う。」

林業の担い手育成は地域の重要課題だ。最新2010年の国勢調査によると、県内の林業就業者は1866人。国の雇用支援策などで一時期より増えたものの、30年前の6割弱まで減っている。厳しい環境の中、関係者はバイオマス発電に新たな光を感じている。

玖珠農業高校の指導教諭、河津文昭さん(56)も、その一人。日田市出身で林業が専門。2年前まで日田林工高校で木材のバイオマス利用などを教えていた。玖珠農業でも「林業と農業

「林業への関心もっと」

「この連載は報道部・糸永健太郎が担当しました」